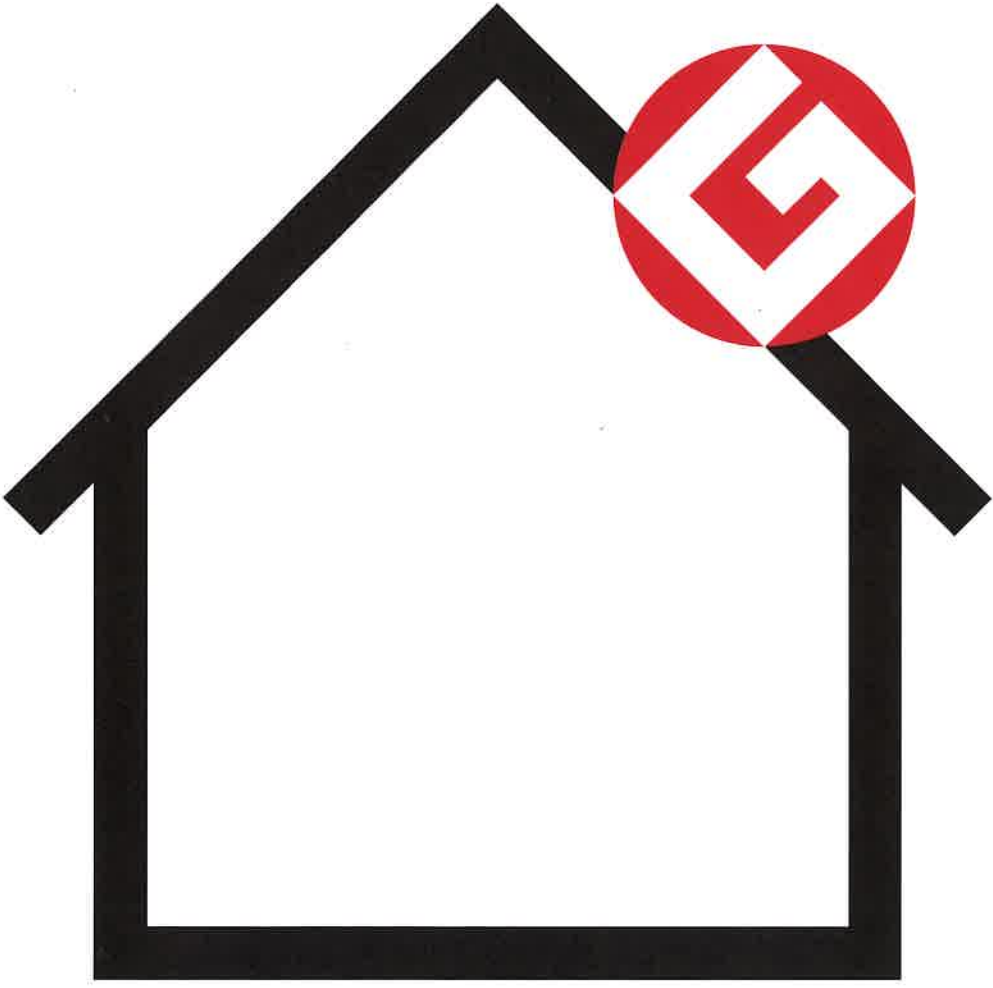


G
マークの住まいデザイン「住まうことのさまざまなかたち」



グッドデザイン賞に応募される住宅にはある種の共通点が見られます。

単に快適で便利で、よく整い洗練された住空間のデザインを誇るよりも、
それだけに止まらないことを指向しているモチベーションが感じ取れます。

「私たちがどのように暮らしたいのか・どのような暮らし方が実現できるのか？」

そんなとても根源的なことを、住宅という対象を媒介して
デザインしようとしているのではないのでしょうか。

そうしたデザインの成果としての住宅だからこそ、そこには、人々の
望ましい暮らしを実現していこうとする意志と姿勢が確かに認められるのです。
だからグッドデザイン賞の住宅審査では、建築物としてのデザイン以上に、
住宅を取り巻く様々なこととの関わりに目を向けます。

社会の通念や規範との折り合い方、立地する周辺的环境や人々との接し方、
過去から何を学んだか、将来の社会へ及ぼすインパクトが
どれだけあるかー建築分野の専門賞とは違うグッドデザイン賞として、
「社会の中に存在する住宅」としての関係性、波及性、影響性、提案性を
読み出しながら、その住宅が何をデザインしようとしているかを常に重視しています。

この冊子では、グッドデザイン賞における住宅審査の歩み・考え方とともに、
それが象徴された、様々な住まいのかたちを実践している
全国の8つの歴代の受賞住宅を紹介しています。

それぞれの住宅の像を通じて、私たちが住まうこと・生きることを
デザインしようとする創造的な営みの尊さを感じ取っていただけるとともに、
住宅という対象を通じて日々より良い『住まいのデザイン』を志す
皆様の参考になれることを願っています。

グッドデザイン賞が住宅を審査の対象とするようになったのは1990年代からです。もともとグッドデザイン賞が製品のデザインや工業デザインの評価を中心とした事業として始まったこともあって、住宅についても、まずは製品として一定の規格化と量産性を伴った商品化住宅、いわゆるプレファブ住宅と称される、大手ハウスメーカーによって開発・供給される住宅が対象とされました。

施主の要望と個別の条件に沿って建築家が一邸ごとに設計し、量産という概念の対極にある住宅と違い、商品化住宅は住まいの性能や規格をパッケージ化して、それを必要とする不特定多数のユーザーへ提供することができる「マスプロダクトとしての住宅」といえます。それだけに、メーカーが提唱する性能や規格や品質がいかに高い水準でまとめられているか、多くの住まい手の要望に応えられその満足度を高めるための商品内容が備わるか、工業製品としての適切な生産性やコストなどが配慮されているかが、主要な評価のポイントとされました。

ハウスメーカーが主導して形成された住宅市場は、各社が積極的に商品性の充実に務めることで、多種多様な住宅の供給が続けられ、1996年には『GENIUS 蔵のある家』（ミサワホーム）が最高賞であるグッドデザイン大賞に選出されました。

2000年代に入ると、グッドデザイン賞の審査方針が大きく変化しました。メーカーなど商品を開発・生産・供給する立場（＝サプライ）を基軸とした観点から、利用する側（＝デマンド）の観点に立ったデザイン評価へとスライドしました。

それは、デザインは、作り手側にとって都合のいい論理に沿うより、本来それをもっとも必要としているユーザーの存在を尊重して価値がもたらされるべきだ、という「人を中心としたデザインのあり方」(Human Centered Design)の考え方を踏まえた新方針でした。このような評価方針の根本的な転換は、グッドデザイン賞の住宅審査に、それまでのハウスメーカーや工務店などが提供する商品化住宅だけでなく、職能建築家による個別設計の住宅が対象として加わることを自然と促しました。

特定の施主(ユーザー)に対する最適な住まいのデザインとして提示された住宅は、規格化・量産化が前提の「商品」展開とは異なる、個別最適の追求でありながらも、そこには全体最適の達成へ向けて応用が可能な要素や、社会や人々に望ましい全体最適を求めていく上での重要な示唆となる提案性が認められるからです。言ってみれば、「人と住まいとの関係」のプロトタイプ・デザインとしての意義が備わっているのです。

グッドデザイン賞と 住宅領域

やはり2000年代になると、デベロッパーなどが主体となって開発を手がけた集合住宅がグッドデザイン賞に応募されるようになりました。

小規模な集合住宅や共同住宅から、都市開発のレベルに位置づけられるほどの大規模な集合住宅まで、特に日本の都市部における住宅供給の主体が集合住宅である点を反映して、「都市において集まって住む」ことに対する各社からの提案が毎年多数応募されています。

それらは時々の社会情勢や人々のニーズを背景とする市場性が色濃く反映されていることを前提とした評価が必要になりますが、提供されるスケールとしては都市機能の一翼を担うひとつの「部位」にも相当することから、グッドデザイン賞においては特にコミュニティやインフラの形成・維持という視点からも評価されています。

いまグッドデザイン賞の住宅の審査において、より重要性を増しているのが「全体状況の中における住宅」という考え方です。

単体でみれば独立した住居であっても、それは同時に景観を成す一部であり、地域社会を形成する要素であり、その時々の社会の要請や人々の暮らし方・生き方が反映される場であると言えるでしょう。ただ単に住まい手の要望のみに基づき、自己完結的にその充実を追求するのではなく、周囲の社会状況との間でいかに折り合いをつけ、時には社会に積極的に働きかけることができているのか、その上で審美的にも説得力が高いデザインへと昇華されているか。それは戸建住宅でも集合住宅でも共通のポイントです。

このような考え方に立って、グッドデザイン賞ではビルディングタイプとしての住宅の質はもとより、コミュニティを意識した設計やオペレーションの質、人が住み暮らすための場・環境として求められるマネジメントやプログラムの質までを読み解き、それらがこれから先の住宅の指針(モデル)としていかに示されているのかを重視しています。そして、近年のCOVID-19パンデミックがもたらした、人々の生き方の変化=ニュー・ノーマルの到来は、人が住まうことの意味さえも問い直し、住宅が持つ役割、人と住宅との関係をさらに抜本的に改めつつあります。

環境、情報化、サステナビリティ、インクルーシビティなどに代表される、私たちが共通して向き合うべき大切な事項との関係も踏まえながら、望ましい住まいの像を見出していく。それこそがグッドデザイン賞における住宅のデザイン評価における要諦であると言えます。

Gマークの住まいデザイン 年表

2013

GENIUS GATE



2014

住みつなぐ家づくり 骨の見える家
食堂付きアパート



2015

木のカタマリに住む



2016

住居と園庭
ホシノタニ団地



2018

紀の国住宅・きの家
ゆいま〜る高島平
町営住宅河和第二団地
釜石市の復興公営住宅
(大町復興住宅1号、天神復興住宅)



2019

櫻の音terrace

プライムメゾン江古田の杜

グランドメゾン江古田の杜

HYPERMIX門前仲町



2020

ソーラータウン府中



2021

神水公衆浴場

house S / shop B

風花山本

ジョンソンタウン



2022

HOWS Renovation「国立の家」



歴代グッドデザイン賞受賞住宅の一例 -2013 年度以降のグッドデザイン・ベスト100 選出対象から抜粋



「Gマークの住まいデザイン」展として、近年グッドデザイン賞を受賞した全国の住宅から選んだ8件を、2022年春に東京ミッドタウン・デザインハブで紹介しました。

この8件は、グッドデザイン賞の住宅領域の審査を担当されてきた藤原徹平さんが、審査の経験を踏まえて独自の観点から選び出したものです。藤原さんは建築家としての目線だけでなく、グッドデザイン賞というフレームを通して見えてきた住宅デザインの価値をすくい取ってくださりました。

そもそもこの企画は、建築領域の専門賞ではないグッドデザイン賞だからこそ見出せる住宅デザインがあるし、それを社会へ示す意義は大きいのではないかと—そのような藤原さんからの働きかけが発端でした。

実際に、グッドデザイン賞として住宅を審査の対象にするようになってから30年以上が経過して、全国各地の素晴らしい住宅デザインの取り組みが多様な受賞事例として十分に蓄積されていました。

グッドデザイン賞の住宅に共通するのは、人が住み暮らすための場をつくるという大前提に対して、いかにその人の暮らしがより充実するか・暮らしのベースとなる地域や社会によりことがもたらされるか、という考えに基づいて成り立っていることではないでしょうか。

いま住宅は、住む人の存在を何より尊重しつつ、関係する他者や立地する地域や環境にも有益で、将来にわたって価値が持続できる存在であるかが問われています。近年は特に、急速に進む高齢化やCOVID19の発生といった社会の大変動を受けて、人々の時間と空間の使い方がこれまでとは大きく変化しており、「住む」という営みが私たちの生き方に与える影響はますます高まっていると言えます。

こうしたことへ想いを至らせながら、住宅の設計や運営に様々な人が臨んでいて、何よりもそれぞれの住宅で日々素敵な暮らしが営まれています。いままさに、全国の至るところで「住まいのデザイン」が豊かに繰り広げられているのです。

Gマークの住まいデザイン 企画について

グッドデザイン賞を住宅が初めて受賞してから、33年目になります。最初は多くのプロダクトに混ざって審査されていた住宅も、のちにグッドデザイン賞として住宅部門を設けて審査を行うようになりました。

当初、住宅部門は「ものとしての住宅」が審査の中心でした。つまり、住宅の性能や品質、空間の質について社会的に評価し、その試みを推進させていくという形です。これはいまでももちろん重要な審査の軸ですが、近年では、ものとしての住宅ということに留まらず、住宅という対象を通じて、私たちがどう生き、どう暮らすのか、未来の住まい方に向けてその本質的な問題を提起するプロジェクトの受賞が増えてきています。つまり、「社会デザインとしての住宅」という評価の軸が備わるのです。

私がグッドデザイン賞の住宅部門の審査に参加するようになって、一つの驚くべきプロジェクトに出会いました。

「ソーラータウン府中」という住宅地開発プロジェクトです。

地域材の活用を真摯に続けてきた地場の工務店と、OMソーラーの開発に関わり環境と住まいの関係を模索し続けてきた建築家の協働によって生まれたこのプロジェクトは、まず住宅単体の環境性能が大変に素晴らしく、次世代住宅の指標となる品質でした。しかし、そうした高性能の住宅を単に並べるのではなく、どうすれば住宅が集まることで良いまちがつかれるのか、土地所有、環境性能、コミュニティのつくり方など、一つひとつ丁寧に向き合っただけからの望ましい住宅地をつくる試みをしています。コロナ禍で暮らしの改革が問われる中で、こうしたプロジェクトをグッドデザイン賞に推すのが重要なのではないかと、住宅部門の審査委員一同で推薦してみると、ありがたいことに他の部門の審査委員からも強い共感の声が集まったのです。

建築分野には作品賞や専門媒体がいくつもありますが、実はこの「ソーラータウン府中」のような、まちをつくるプロジェクトをきちんと顕彰する場がありません。

そこで、グッドデザイン賞の枠組みを通して、未来社会の在り方を問うような、先進的な住宅デザインのプロジェクトを広く社会で紹介できれば、建築や都市計画におけるグッドデザイン賞の存在意義自体も探っていくよいきっかけになれるのではないかと考え、「Gマークの住まいデザイン」の企画を2022年に開催しました。

ここでは、「住まい」を通じてこれからの社会の在り方を指し示す素晴らしいプロジェクト8件を4つのテーマから紹介しています。

いずれのテーマにおいても重視したのは、設計者や企画者の立場からだけでなく、そこに実際に住んでいる人や暮らしている人の姿から、住宅がもたらす価値が伝わることです。そのために、全てのプロジェクトを直接訪問して当事者へ取材をしました。

この企画では、東京、埼玉、京都、兵庫、広島、熊本のプロジェクトを扱っていますが、実は展示対象の候補に挙がったプロジェクトは全国に及びます。

いま、日本の各地で、未来社会に向けたチャレンジが、互いに共鳴しあいながら、現在進行形で動いていることを感じさせてくれることでしょう。

藤原徹平

現代の理想郷

人間は物語をつくる動物である。

伝染病、環境問題、グローバル経済、人口動態など
対処すべき難題が山積みの中で、

だからこそ理想に向かう物語を描く必要がある。

物語を支えるのは、理念であり、思想である。

どう生きるべきか、どういう社会をつくるべきか、

その想い形にした奇跡のようなプロジェクトが

実際に日本にはいくつも存在している。

どうやってそうしたプロジェクトが実現しているのか、

それを丁寧に調べ、深く共感し、自分もやってみようアクションする。

そんな連鎖が未来社会に向かうエンジンになるのだと思う。



ジョンソンタウン



受賞者——(株)磯野商会
渡辺治建築都市設計事務所
設計者——渡辺治建築都市設計事務所
渡辺治、川合麻美、斉藤美幸、
大沢裕美、前垂里紗、坂本紀恵
所在地——埼玉県入間市
利用開始——2004年4月

戦前戦後に元入間基地の前に建設され、スラム化していた2.5haの住宅地のまちづくりである。残存していた23棟の米軍ハウスは改修し、住んで働ける未来の標準住宅「平成ハウス」39棟を新築し、新しい街路もつくった。その結果、子育て家族、高齢者、障害者などが住んで楽しく働き、交流が生まれ、仲が良いコミュニティが息づくまちに育った。
2021年度グッドデザイン金賞。



ジョンソンタウン



若い頃からアメリカ文化に憧れていたこともあり、店、住む、子育て、という観点で複合的に検討した結果、2012年からここに住み始めました。その後、タウン内で移転し、2021年末に再開店したところで。

ここは、住む環境として申し分ありません。スーパーや駅、圏央道のICがあるなど、立地がよくて暮らしやすい。何より、仕事をしながら帰宅した子どもを迎えられるので、勤めていた頃より格段にストレスが減りました。しかし商売の面では最初、集客に苦労しました。当時のジョンソンタウンはまだ知名度が低く、観光客も少なかった。「まずジョンソンタウンが有名にならないと商売にならない」と思っていたのですが、だんだん、自分自身の土台を固めて店の知名度を上げていくことが大事だという意識が変わってきました。今は、店の認知度も上がり、週末は県外からも訪れてくれます。

古いものを受け継いで住むこと、住人の手作り感や暮らしぶりが残っていることが、やはり米軍ハウスの魅力だと思います。昔の住人の塗ったペンキの跡など、家の随所に、その家の記憶が現れてくるのも楽しい。ここは大工の夫と2人で改修しました。で

きるだけ米軍ハウスの建設当時の姿に再現しようと、かなりこだわって、夫が携わった古い米軍ハウスの解体や改修の工事現場から引き取り保存していた廃材や建具を活用しています。私たちは自分たちで全部を希望通りに改修できて、本当に幸運でした。

子育てで一番よかったのは、ここには、自分の好きな仕事をしている多彩な大人がいること。昔の商店街と一緒に、子どもたちが、日々、親や親以外の大人が働いて、人と関わり合っているのを見て、いろいろな価値観を吸収して育ってくれているのは喜びです。子どもたちは、多様な選択肢を持って人生を送るのではないのでしょうか。

高橋 みきえ(たかはし みきえ)
Mellow Food CAFÉ

以前はインターネット専門の古書店を営んでいましたが、いつかは実店舗も持ちたいと思っていました。都市部よりも郊外で店

舗と住居が一体となった物件をと考え探していた頃、観光でジョンソントウンを訪れて一目で気に入りました。2020年に平成ハウスの2階を住居、1階を店舗として住み始めました。翌年に結婚したことを機に住居を近隣の団地に移し、現在この場所は店専用にして書庫や作業スペースを広げました。

他の古書店よりも店のスペースは広くて余裕があり、落ち着いた環境です。ありがたいことに売り上げも想定通りで、特に週末は来客が多く、来客の少ない平日は広くなったバックスペースで作業しています。

近くには幼稚園があり、日々、目の前を散歩している幼い子どもが通るなど、住環境も整っています。妻とは大学の部活動を通じて知り合い長く一緒に暮らしていたのですが、都会よりもここで子育てをするほうが、子どもにもプラスになるのではないかと思えたことが、結婚の後押しになったのかもしれない。

コロナ禍以前は、住民同士でバーベキューを開催するなど、住民間の交流を促す機会があったと聞きますが、私たちは残念ながらまだ体験できていません。タウン内の住民と挨拶はしますし、本好きの住民が時々訪れて本を購入してくれますが、多くの住民とはまだそこまで親しくできていないので、これから先が楽しみです。

日々暮らしていく上で、人との距離感、自然との距離感、都市との距離感など、ここはすべてにおいてバランスがよいのかと思います。この場所をベースにしながらい県内のイベントにも参加するなどして、仕事の幅も少しずつ広げていけそうです。

森下 亮平(もりした りょうへい)
逍遙館

6年ほど前、知人に誘われ何度かこのまちに接するうちに気に入、「ほぼ原型で残っている米軍ハウスを維持してくれる人に住んでほしい」という打診に応じて、この米軍ハウスに住み始めました。ここは建設当初の床とベニヤ板の壁のままで、随所にパテ埋めなど昔の住民の痕跡が残っています。断熱も今の水準には及ばないから春先でも石油ストーブを焚くぐらい寒く、結露もひどい。けれど味わいがありますね。

長年、国内外で都市計画や宅地開発の仕事に関わる中で、職住の近接した暮らし方や、歩いて楽しいまちであることが大事だと考えるようになりました。ジョンソントウンはコミュニティが横(水平方向)に広がる方がいい。横型のコミュニティは、その

周囲をも取り込んで界限性が豊かに広がっていくんです。実際に、この場所でも住民や店主たちと情報交換していくと、コミュニティがどんどん横につながっていきました。

ここでは、近隣の子どもの育つ姿をいつも見ているし、互いに訪問し合っって一緒に食事をしたり、バーベキューやお食事会もある。また、キャンプ、釣り、自転車、自動車など、趣味でつながる住民の様々なコミュニティもあります。流行に左右されずに、自分のライフスタイルを貫いている住民が多いですね。僕は音楽が好きで、こだわりのオーディオ機器と好きなアーティストのレコードが大量にあるのですが、音楽関係の仕事を手がけるグラフィックデザイナーの住民とも情報交換しています。

今では、タウン内の壁やドアの色を決めたり、ポストカードやクリスマス装飾など、仕事でもジョンソントウンと幅広く関わっています。若い人と一緒に、ここで小さなミュージックバーをやろうとも計画しています。昼間は仕事をして、夜は音楽を聴いていたい。どうせ音楽を聴くなら他人にも聞かせて、一緒に酒を飲もう、と。ジョンソントウンでそんな生活をしていきたいですね。

中嶋 正己(なかじま まさみ)
中嶋デザイン事務所

ジョンソントウンを何度か訪れるうちに、「やりたかった夢は、ここで店を開くことだ」と確信。住宅に空きが出るのを1年ほど待って2021年末に移住し、2022年1月に開店しました。

街並みや建物の雰囲気、私のやりたかったことのイメージをどんどん膨らませてくれるところが魅力です。狭山茶と和菓子でくつろげる和風カフェと、頭痛や肩こりに効く耳つぼサロンで、訪れる人がほっとできる場所にしようと思いました。

パートナーが店を全面的にバックアップしてくれて、改修も、壁の塗装以外は、自分たちで建具も含めて1つずつ手作りしています。明るくシンプルな空間にしたかったので、梁は目立つように白く塗りました。カウンターに使った板は、保存していた一枚板で、屋外席のテーブルも以前から持っていた一枚板です。

集客としては、まだ平日は少ないものの、順調に増えています。ジョンソントウンの住民と管理事務所のスタッフも常連になってお茶を飲みに来てくれたり、時々、気にして来店してくれるなど、いつも応援してもらっています。

今後、まず10年間は、多くの人に店を知ってもらい、店のファンを育て、宣伝や商品の見せ方を工夫しながら、とにかく頑張っ

やっていきたい。居心地のよい場所で、好きな人と一緒にいることを大切に、ジョンソントンで暮らしていきたいです。

nao
spoonful smile

子育てと親の介護を終え、郊外にアトリエを探していてジョンソントンに出会いました。2019年の夏から住み始め、その年の秋にはギャラリーをオープン。当初はギャラリーを設けるつもりはなかったのですが、ここに来たらインスピレーションが湧き、せっかくだから多くの人に作品を観てもらいたい、と。ギャラリーには年間約1,000人が訪れてくれます。「ミウラ折り」という特殊な幾何学折りによって、紙やフィルムを立体にしたオリジナル作品を展示販売しているほか、ミウラ折りの魅力を伝えるワークショップも開催しています。

もともと以前住んでいた場所から移る気まではなかったのに、このまちを見たとき、気に入って住まいも移しました。何よりもまちの成り立ちが面白く、それがクリエイティブな思考に基づいて生かされながら、統一感のある街並みと魅力的なコミュニティになっていることがよかったです。

移って来てすぐに、住民数人と知り合いました。ここでは禁止事項が少なく、焚き火やバーベキューもできる。皆がお互いに「近隣に迷惑をかけない」という最低限のマナーを守りつつ暮らしている。居心地のいい寛容性があるのです。

ここで暮らす前までと比べて大きく変わったのは、いろいろな人との出会いがあること。隣の公園に子どもを遊ばせに来ていた人が、ギャラリーに目を留めて入ってきて、思いがけず大型作品を気に入って購入してくださったり、タイ王国の大使がお忍びで来訪されたことも。ここには個性的な人が集まるから仕事の幅も広がりました。

毎日、四季の味わいを肌で感じ、自然のパワーをもらって、1日を楽しく暮らすことができます。長いこと忘れていた大事な感覚を、ここに来て取り戻せたのが嬉しいです。

びわ ゆみこ、村上 哲夫(びわ ゆみこ、むらかみ てつお)
BIWAHOUSE Gallery

誰もが共存して暮らせるまちづくり

ジョンソントンは、戦前は陸軍将校用の賃貸住宅地で、戦後、米軍の接収により進駐軍の家族向けに米軍ハウスを建て、米軍の撤退後に返還された、という長い歴史を持った住宅地ですね。事業を引き継いだときにどうして住宅地として残そうと考えたのでしょうか。

磯野達雄(以下、達雄)：この土地は戦前、1936年に私の父が取得した製糸会社の農園20万坪が元になっています。私は、1996年に勤めていた電機メーカーを辞して磯野商会の社長に就任し、事業経営に当たることになったのですが、当時ここはとても荒廃していて、高齢者と低所得者の住む住宅地になっていました。当初、更地にしてマンションでも建てようとも考えましたが、2つの理由で断念しました。1つは、戦前から地元で世話になってきた者として、高齢の入居者たちを追い出すような酷いことをしたくない。穏やかな開発を進めるべきだと考えたこと。もう1つは、米軍ハウスに戦後住宅の歴史を研究する上で保存すべき文化的な価値があると思ったことです。

それで、米軍ハウスを中心にした住宅地として再生する道を選択しました。けれど、再生はゼロから始めたわけではない。すでに戦前からの土地があり、昔から建っていた建物があり、住宅地として営まれてきた伝統がある。原質がそれほどかかっていたため、ジョンソントンの経営は成立したのだと思います。最初から明確でしっかりとしたコンセプトがあってそれに向けて着々とまちづくりをしてきたわけではなくて、ただ「良い住宅地をつくりたい」という思いで、一生懸命に進めてきただけの結果なのです。

ジョンソントンには、個性的で魅力ある住民が多いように思っています。入居前には「社長面談」があり、住民のみなさんにとって印象深かったようですが、どのような面談で入居者を選んでいるのですか？

磯野章雄(以下、章雄)：入居者の面談は、基本的に、社長、私、管理事務所へ常駐している者との3人で実施してきました。質問する内容は、他愛のないことが多くて、入居審査に明確な基準はありません。感性や、互いの第一印象が大きいように思います。ジョンソントン自体がかなり個性的なまちなので、そもそもここに住みたいと訪れる人々は、おしなべて個性的な人が多いです。けれど、個性的なことは問題ではなくて、共同生活を営む上で迷惑をかけない人なのか、景観など文化的価値を共有できる

のか、そのあたりを見てきたように思います。

達雄：賃貸住宅ですから、基本的に、私たちは安全で、最低限その時代ごとの平均的レベル以上の生活が維持できる住環境を提供し、入居者は経済的に家賃を払える人物であることが大前提です。それ以外に大切にしていることが2つあります。1つは住宅地の景観を重視すること。もう1つは、住宅地のコミュニティを大切にすることです。

ジョンソントウンに求める景観のイメージについては、基準を言葉で表現できないのですが、私が子どもの頃から抱いてきた魅力的な住宅地のイメージと、若い頃、アメリカ合衆国に滞在して馴染んだ美しい住宅地のイメージなどが総合されたものになっています。私とスタッフの景観のイメージには多少のギャップもありますが、現状の景観を大切にしていこう考えは共通しています。

コミュニティについては、たとえ賃貸住宅でも住民が仕事と家の往復だけで、近所付き合いもせずに家に閉じこもっているのではつまらない。魅力あるまちにするには、かつて日本のまちの良さでもあった隣近所の付き合いがやはり必要です。以前、人の気配がなく美しい模型のように整った他の住宅地を視察しましたが、私には寂しくて仕方がない。住宅地というからには、生活感があり、平日でもある程度、人が動いてほしい。そのためには、住宅地の中に店舗も必要だと思うようになり、店舗も受け入れるようになりました。

ここで店舗を営んでいる方には、商売をするだけでなく地域の魅力を高めることにも意義を見出している方が多いのでしょうか。

達雄：この2つに前向きに協力してくれて、自分勝手なことはないという価値観を持っている人に入居してほしいと願っています。たとえば、生活感といっても、前面に洗濯物や布団を干してあるのは困りますが、家の裏側で洗濯物が干されているのは、住宅地として必要な景観だと思うのです。そういう区別がわかり自制できるような価値観の持ち主に入居してほしい。それが、常務の言った「価値観の共有」です。

ジョンソントウンでは、コミュニティづくりとしてどのようなことを実施していますか。

達雄：実際には、コミュニティづくりに積極的に参加する住民、受け身で参加する住民、全く無関心の住民がいます。コミュニティ活動に積極的に参加していただいている住民は、ジョンソントウンにとって資産だと思っています。

章雄：敷地内に管理事務所があるので、住民は気軽に相談に来られます。また住民同士の活発な交流を意識して、このまちなしいイベントを企画し、実施してきました。住民主導のイベントでは私たちも設営を手伝います。

各住戸の主庭をはじめ通り庭や路地沿いの庭などには塀がないので、それぞれに個性を持ちつつ統一感のある魅力的な庭がつながり、ジョンソントウンの美しさをつくっていますね。

達雄：私は、樹木や植物、陽の光や涼風など自然が大好きなので、最初からなるべく緑豊かな住宅地にしたいという思いがありました。特に木については、かなり大きな木でも伐採せずに、邪魔だったら移植するという方針で進めてきました。専門家はいませんが、移植のために、担当の者を管理事務所に置いて、パワーシャベルやクレーンのついたユニック車を購入しました。とはいえ、高級な木を上手に剪定した庭作りはとてできないので、ワイルド・ガーデンでいいという程度ですが。専門の庭園業者に頼むと整え過ぎてしまうので困るのです。建物や街並み全体の雰囲気についても同様で、人が生活する場所だから、多少の生活感はほしい。私は、ここをゴミ1つ落ちていないテーマパークにはしたくないのです。

高齢化社会では、60歳や65歳で定年になった後に残りの人生が20年以上あると考えれば、店を持つなど、働いたり、自分の場所をつくっていくことは、人生にとって非常に重要だと思います。それがジョンソントウンでは、とても自然な形でできていてすばらしい。今後はどのようなまちにしていきたいですか？

達雄：私の「価値観」を軸として住宅地であることを大切に運営してきましたが、店舗がずいぶん増え、騒々しくなってきたことは否めません。それで、できるだけ住居エリアと店舗エリアを区画分けしたいと思っています。とはいえ、今後は、世の中の新しい動きに合わせて、新しいコンセプトで、新しいまちをつくるという覚悟が大切になります。

少子高齢化の進む日本で、今後求められるのは、設計者の渡辺治さんも目指している福祉のまちです。子どもから高齢者まで幅広い年齢層の人々がここに住み、ここに一生住み続ける人々が中心となったまちになるといいですね。

章雄：私は、住民に加えて、ジョンソントウンへの来訪客が、このまちを大いに活気づけていると考えています。また住居エリアと店舗エリアの区画分けについては、「住宅なのか、店舗なのかわからないところにドキドキ感やワクワク感がある」という来訪

者の感想の通り、住居と店舗が混在しているところがこのまち独特の魅力だと思うのです。厳しいルールを決めたり区画分けをした方が管理は楽ですが、できるだけ緩やかなルールでまちの良さを生かしていきたいです。

その一方で、私も福祉のまちにしていきたいと考えています。ジョンソントウンには、比較的若い住民が多いのですが、その住民たちも歳を重ねれば高齢化していきます。そんな中で、「定年退職したらジョンソントウンでバーをやりたい」という60代の住民がいますが、高齢者が活発に生き生きと夢や目標を持って活動していけるようなまちにしていきたいのです。

さらに今後の取り組みとしては、ほぼバリアフリーになった平屋中心の住宅地という特性を活かし、在宅支援サービス機関などと連携して、介護が必要な高齢者や障がい者でもこのまちに住み、何かあれば在宅で診療を受けられるように整備をしていきたい。経営的に成立するかたちで、社会のさまざまなインフラを活用しながら、ライフサイクルに応じて住民がまちの中で住み替えられるような循環型の仕組みを整えて、子どもから高齢者まで誰もが共存して住めるまちを目指したいですね。

磯野 達雄(いその たつお)
株式会社磯野商会 代表取締役社長

磯野 章雄(いその あきお)
株式会社磯野商会 常務取締役

「再生」から「理想のまち」の実現へ

ジョンソントウンの設計に関わることになった経緯を聞かせてください。

土地の所有者で运营管理に携わる磯野商会の磯野達雄社長との出会いは、2002年に、磯野社長の親族を介して、ジョンソントウンの再生計画について相談されたときですが、互いの経験には共通点が多くて、出会うべくして出会ったように感じます。私は学生時代に都市計画を学んでいて、はじめて渡米した際に偶然、ニューヨーク郊外の著名な田園都市Forest Hills Gardensに住んだことが、住宅地域計画に強い関心を持つきっかけとなりました。そこは安心感のある緑豊かな住宅地で、上質な暮らしと団結力の強いコミュニティがありました。

調べていくと、とある1人の女性の私財を投じてつくられた財団(Russell Sage Foundation)によって、子どもの貧困、ネグレクト、DVなどの都市問題を解決しようと、イギリスの田園都市論をベースにしてつくられたことがわかり、いつか日本にもこんな住宅地が必要だと思いました。ニューヨークやイギリスで当時つくられた田園都市は、産業革命以降、台頭した資本主義によってできた大都市圏での社会的な問題を解決しようとするものでした。

その後、ペンシルベニア大学に留学して世界各地の田園都市を中心に調査・研究しましたが、帰国してからは、残念ながら、私の理想は理解を得られず、こうした住宅地の設計に携わる機会はありませんでした。

一方、磯野達雄さんは若い頃、アメリカ合衆国に滞在する機会があり、そこで良好な住宅地の魅力を体感していました。彼が社長に就任した1996年当時、「磯野住宅」と呼ばれていた現在のジョンソントウンのエリアは荒廃しており、周辺住民から「磯野スラム」と揶揄されるほどでした。この状況に衝撃を受けた磯野社長は、協働できる者を探していたようです。ご自身でも行政出身のまちづくりの専門家の引率で、私の住んでいたForest Hills Gardensも含め、アメリカ各地のすぐれた住宅地を視察したそうです。

当時の現地を見てどんなことを考えましたか？米軍の依頼で建てた米軍ハウスを残す決断をした理由は何ですか？

磯野社長は、高層マンションなどを建てて土地ごと売却するのではなく、何とか住宅地として残して再生したいと考えていたようです。

現地を見たときには、雨天になると、水はけの悪い未舗装の街路には水が溜まり、勝手な増改築を重ねた住宅の外壁の塗装は剥げ、土台は腐食していました。高齢者しか住んでいない上に、中には長年住み続けてゴミ屋敷のようにになっている家もあり、「終わったまち」という印象でした。

しかし、米軍ハウスの平面図を見ると、1953年の設計なのに、広い水周りやダイニング・キッチンなどが、車椅子で住めるバリアフリーになっていて驚きました。調べてみると、GHQの記録に、米軍住宅は「住宅復興策の一環として日本政府が建設を要請された」という言葉が残っていて、また「日本人にとっては新居住・新生活様式の先駆になされ得るものとすべき」と指示を出している。一方、GHQは住宅の設計については、工期、コスト、形、広さ、材料など、すべての面で合理性を追求させ、最短期間に最低コストで建て、単純明快で合理的な住宅をうまく並べて素敵な街並みを作れる住宅を設計するようにも指示されていました。そこで、Forest Hills Gardensなど、欧米各地の魅力的な住宅地を目標に据え、ジョンソントウンの再生計画を引き受けました。住宅地区の設計は、リスクを避けたいオーナーとの間で難航することが多いのですが、ここでは、私の提案が磯野社長や磯野章雄常務に共感してもらえたこともあり、奇跡的に、思い描いていたまちの実現へと向かいました。

当時は、米軍ハウスと日本家屋が混在していて、日本家屋の解体、老朽化した米軍ハウスの改修、平成ハウスの新築により、まちなみの整備を進めたんですね。

米軍ハウスも平成ハウスも居住者が自由に改修してよいことになっています。米軍ハウスは、すべての決め方に合理的な理由があります。屋根は、4寸勾配(21.8度の傾斜)で建設時や補修時に足場がいらず、滑らないように傾斜角度が決められています。部材を三角形に組み構造体として独立した屋根の木造トラス構造は、地上で組み立ててから片方ずつ壁の上に載せ、ぐるりと回転させて立ち上げれば、重機なしで簡単に設置することができます。そこに母屋部材を掛け、板を渡せばそれが足場となる。平面計画はすべて同じ、同じ寸法だから、同じ建材を使えば効率がいい。内装材は安価なベニア合板で、ドアはなるべく付けない。米軍ハウスを設計した吉沢誠治は、米軍基地に出入りして基地内の進駐軍住宅(基地内にGHQが建てたハウス)の建て方を学んだようです。広いダイニング・キッチンは彼の独自の設計で、当時の基地内の進駐軍住宅では、使用人がいたためダイニングとキッチンは分かれていました。

私の設計した平成ハウスは、米軍ハウスの意思を継ぐ未来の標準住宅として、議論を重ね、多様な人が住むことを考えて仕様を決めました。広さは「米軍ハウス」を踏襲しましたが、床は、床暖房を備えたコンクリートの床、屋根は、屋根裏に最大4部屋取ることができる、2×4工法の垂木構造に変えました。2階の床は簡単に取り外せるので、床を足したり、階段の位置をずらしたり、自由にプランを変えることができます。ドアはなるべく付けず、部屋名は付けませんでした。そういう点が、結果的に、2階に住んで1階を店にできるような、店舗併用住宅の増加につながっていきました。

建つ向きが違うなど、各住戸はあまり画一的に見えませんが、設計で工夫したところはどこでしょう。

ここでは街並みの景観が最優先なので、住宅には「屋根の傾斜」「屋根の色」「玄関のある面」「窓や入口は4種類(上げ下げ窓、はめ殺し窓、両開き、左右非対称の引違い)」などに関する統一したデザイン・コードを自ら決めて平成ハウスを設計し、街並みを整えました。看板やテラスをつくりたい、入り口扉の色などを変えたい人は申請して、住民と管理サイドで組織する委員会を検討して許可を出す、という仕組みです。

住宅の配置については、隣家と関係を持ちやすいように、家の建つ向きを、さまざまに工夫しています。日本の一般的な住宅は、南向きに建てることが多いので、横並びか、隣家に背中を向けて建つこととなりますが、背中を向けていると、隣家同士が仲良くなれませんよね。欧米では必ず家と家が向き合うように建てます。たとえば、ニューヨーク郊外のSunnyside Gardensでは、街区がコの字に中庭を囲んで居間同士が向き合う配置になっていて、街路から庭が見えるので、視線を意識して居住者たちは中庭を美しく整えるのです。庭同士が面していて庭いじりをする父親と庭で遊ぶ子どもたちが仲良くなる、街路を挟んでキッチン同士が向き合っている、母親など料理する人同士が顔を合わせてコミュニティができる、というようなことが起こっています。

ジョンソントウンでもこれに倣って、街路を挟んで会話が発生しやすくなるように、北東街区では、街路を挟んで居間同士が向き合う配置にしています。居間同士が向き合っているところでお店になっているところもありますし、いずれも互いに顔の合わせやすい配置を工夫しています。これは、たぶん賃貸住宅だからできることでしょうか。分譲住宅だったら、通常は「なんで北に向けて建てるの?」と怒られて終わりです。

ジョンソントウンの住民はみんな個性的で、それぞれこだわりがあるけれど、コミュニケーションを求めて来た人たちだから、うまくいっているように思います。路地やポーチがあるから、出会いと会話が生まれ、お店も多いので、そこに行けば会話ができ、自ずとまちじゅうで会話が起きて仲良くなれる。

渡辺さんの暦年の研究の蓄積がなかったら成り立たない、始まっていなかった計画ですね。磯野社長のようにかなり合理性を追求するオーナーに対しては、相当にしっかりした研究の蓄積をもとに粘り強くビジョンを提示しないと、やりたいものを実現できなかったと思います。今後はジョンソントウンでどのようなことをしたいですか？

当初は「バリアフリーのまちづくり」と銘打っていたのですが、現在は、「生涯住めるまち」「高齢者や障がい者を含めて、誰もが生きがいをもち、住んではたらけるまち」「インクルーシブ・タウン」もしくは「福祉のまちづくり」と説明するようになりました。

みんなが住めるまちにすることは、実はそれほど難しい。また、バリアフリーや福祉というと、高齢者や障がい者を連想しがちですが、「みんなが住めるまち」なら受け入れやすいのではないのでしょうか。かつて視察した、アメリカのEleanor Smithらが見つけたバリアフリーの「アクセシブル・ホーム」のまちでは、住民はそこに住むことに肯定的で、みな生活をとても楽しんでいるのが印象的でした。便利じゃないか、いいじゃないか、じゃあつくろう、と実に合理的なのです。

日本の大都市圏では、特に高齢者や障がい者が生きがいを持って元気に暮らせていない気がします。そのような人たちが元気になって、自分たちが住んでいるまちで生きがいを持てはつらつとして働ける、そんなまちが大都市近郊や地方でもっと増えていく、そのためにジョンソントウンが先駆的な事例になっていくといいと思っています。

渡辺 治(わたなべ おさむ)

建築家 渡辺治建築都市設計事務所所長

1959年生まれ。1985北海道大学修士課程修了。

1986ペンシルベニア大学修士課程修了。

1991東京大学博士課程修了。

建築学会賞(業績)、都市景観大賞、キッズデザイン賞最優秀賞、アジア都市景観賞ほか受賞。

私たちの住まいをデザインすること

篠原聡子・藤原徹平 対談



時間を内包した住宅のデザイン

藤原: 展覧会を行ったことで、あらためて「Gマークでしか評価できない住宅というものがある」と感じたのですが、それが何であるのか、完全には言語化できていません。日本女子大学の学長に着任するまで、グッドデザイン賞で住宅部門の審査を長らく務められてきた篠原さんと共に、注目する住宅潮流や、いま私たちに必要とされる住宅像とは何かを話していきたいと思います。

篠原: 建築に特化した賞は、竣工という段階で建築が美しくあるかどうかという「切断面」を評価する傾向があると思います。それに比べるとグッドデザイン賞の住宅は、ある種の時間を包摂している感じがします。たとえば「ソーラータウン府中」も2013年竣工で、竣工して7年ほど経ってからの受賞でしたね。2021年に刊行した『アジア・commons』の対談で、立命館大学で法社会学を研究する高村学人さんに「建築をできてすぐジャッジするのは早すぎるのではないか」という指摘をいただきました。「ソーラータウン府中」も敷地に対して地役権というトリッキーな設定をしているので、もし竣工直後に審査をしたら上手くいくのか疑問を感じたはずですよ。

藤原: 今回紹介した8つの住宅を実際に現地を見て、住まい手の話も聞いたことで、暮らしを見ることには建築を見るのとは異なる面白さがあると実感しました。たとえば「ジョンソントウン」のオーナーである磯野さんは90歳くらいの方ですが、まちに対するビジョンをしっかりとお持ちで、まちのあり方の明確な基準を定めています。一方でたとえば庭をつくりたいという人のことはすごく応援していて、材料まで磯野さんが提供しているんです。

篠原: 「ジョンソントウン」は比較的ゆったりと建ち、ゆるくつ

くられているのでいろいろなことが起きやすいように感じます。ニューヨーク郊外に「レヴィットタウン」という戦後の住宅不足に対応すべく建てられた住宅地があるのですが、当初は画一的だったのが住民によるカスタマイズにより個性的な住宅群に変わっています。そこも庭が広くて余裕があったことがうまく活用された要因として大きいんですね。一方で「ソーラータウン府中」の場合、敷地をちょっと「揺すって」いるだけで余裕はそんなにはない。でも絶妙に住みこなしを誘発する配置になっています。『アジア・commons』で調査した場所でも、居住者の住みこなしが起きているところと起きていないところがあったので、建築家としては後から起きることを許容し、居住者の住みこなしをエンカレッジするようなプランもあるのではないかと考えてしまうのですが。

篠原: 建築デザインとしては、ある種のゆるさが必要になるのかもしれないですね。

藤原: 加減が難しいですよ。デザイナーとしては完結したいところでもありますし。

篠原: そういう建築をつくって「創造的にあえて完結させていないんです」と説明しても、なかなか納得してもらえず、中途半端だと評価されてしまうんです。でも、できて5、6年経つと増改築がなされて面白いことが起きるので、それこそ竣工5年後に発表すればよいのかもしれないんですけどね。

藤原: やはり建築は早く発表しすぎ、早くジャッジしすぎなんですよ。

篠原: いつをもって完成と呼ぶのかというのは、この企画を経てより感じるようになりました。「house S / shop B」はJIA新人賞を受賞しましたが、クライアント夫妻の使いこなしがすごいんですよ。1階が奥さんが運営する本屋兼立呑み屋

になっているんですが常連の人たちが面白いんです。審査で来られた長谷川逸子さんたちへの説明がお客さんである彼らによってなされてしまい、「すごい建築だね」と評価されたそうです。またクライアントが後から増築した半屋外の立呑みスペースがあって、その場所が建物をまちにつないでいるんですね。私たちが実際にそこでインタビューをしていると、通りすがりに次々とまちの知り合いの人たちから声をかけられて「すごいね、有名人だね」みたいなやりとりが起きるわけです。建築家が最初に設計した部分だけではなく、できてからの付け足しによって場所の質が変わっていくことにも大きな可能性があると思います。

職住混在の可能性

篠原：紹介されている住宅の多くは商業的な要素を持っている、あるいは働くスペースと住居が一体的につくられていることも特徴で、そういった住宅が増えるとまちの質が変わることもありますね。「ジョンソントウン」ももともとが住宅地ですが、ショップが入って来たことでエリアの質が変わった事例です。コロナ禍を経て「働く場所」「住む場所」といった機能で都市を分割することの限界が浮き彫りになりましたが、今回紹介された住宅には時代性を先駆けて備えたものが多いと感じます。

藤原：「HYPERMIX門前仲町」は基準階の両側が住宅で真ん中がオフィスという職住が混ざった構成なのですが、その良さがコロナを経て実証されたようです。オフィスはコロナで利用頻度が落ちたのですが、企業にとっては家賃負担がそう大きくないのでキープしたい。一方コロナ以降自宅を仕事場にするようになった住人にとっては広い共用部を仕事に使えることは大きな価値です。つまり住むことにも働くことにも使えるようにしておく、どんな状況でも何とかできることが判明したんですね。こうした事例からは、今後、都市や建築に求められる合理性の意味が変わりそうだと感じます。

篠原：機能で分割された近代都市のリスクは、コロナや災害によって明るみになりましたよね。日中に街にいるのが高齢者だけというのが良いわけがないので、住む場所と働く場所が混在する状況を生み出すことを積極的に考えないといけません。都市計画の用途地域も、もう少し弾力的にできると良いのですが……。

地方で高まるデザインの力

篠原：今回の企画では「風花山本」のような地方の工務店によるプロジェクトがフォーカスされているのもいいですね。コロナ以降は主に国内を縦に横にとリサーチしているのですが、日本には沖縄から北海道まで多様な地域性があり、その地域性に素直につくるとしかるべき場所ができるのではないかと改めて感じました。

藤原：最近注目しているのは、地方の工務店のデザイン力が上がっていることです。おそらくデザインがしっかりとできる人が各地で就職し、大工さんと話しながらいい家をいい材料でつくるということをしているのではないかと思うのです。

篠原：都心部では市場原理に抗い難いですが、地方は比較的土壌が安くコストにもいい意味でのゆらぎがあるので、本来いろいろなことが起きやすいんですね。ただしコンサバティブです。住宅というのはデザインの中でも保守的な分野で、たとえば公団住宅の平行配置はお役所仕事のつまらなさのあらわれだと言われがちですが、公団の人によると、あるときからそうでないと入居者がつかなくなってしまったそうです。住まい手が保守的になったわけです。そんな中で、デザインを学んだ若い方が地方の工務店に就職し、新しい価値観でものづくりをはじめているというのは、これまでと違う可能性が感じられる状況ですね。

藤原：ある時期から子どものなりたい仕事ランキングに大工が入ってくるようになりましたが、大都市で企業に勤めるといって将来像があまり幸せではないと気づいた若い人が設計も施工もやる会社に入社し、大工さんと一緒に仕事をするという流れを感じます。逆に都市部はアイデアが必要とされていて、デベロッパーやハウスメーカーの戦略勝負ですね。

篠原：私は集合住宅を意識的に見てきた人間なので、都市を決定づける重要な構成要素となりうる集合住宅が新しい時代の価値転換にどう向き合うのかも期待したいところです。

藤原：ある時期から公団が新築でまとまった数をつくらなくなったので実験的な集合住宅が生まれにくくなっていますが、それに果敢に挑まないと都市がつまらなくなります。

場の運営に責任を持つ志

篠原：「house S / shop B」が上手く展開していますが、まちの質を変えるためには接地階をいかにつくるかが大事で、

日本の住宅はそのテーマがあまり上手く解けていない気がしています。

藤原:大きな集合住宅でも、接地階を無理やり住居にしたりしますからね。店舗を入れるのは無理だと思わずに、どういう店舗があり得るか試行錯誤をすれば最適解にたどり着けるはずなので、諦めない気概が欲しい。「ゆいま〜る高島平」の取材で高島平団地に伺いましたが、思いのほか接地階がいいんです。壮絶な量の団地が並んでいるので見上げるときついんですが、接地階には市場のようなスーパーがあったりとまちとしての秩序が長い時間をかけてつくられていて、住んだら楽しそうな場所でした。また入居者の暮らしがよくて、あるおばあちゃんが注文家具をたくさん追加して住みこなしていたり、住戸は素っ気ないのですが住人によって生きた場所になっていました。一方で、誰のものなのかがややわかりづらい公共スペースはそこまでは生きた場所になっていないように映りました。

藤原:まだみんなが自分の場所だと思える commons にまでなっていない印象でしたね。commons は日本語で言うと「入会地」で、その定義は、そこに当事者意識を持つ人が関わって調整しながら利便性を得られる場所ということです。「ゆいま〜る高島平」の公共スペースはどちらかと言えばケアステーションなので、ここに住む人たちの場所というよりも何らかのサービスを受けるとか、一方的な関係にある場所なのかなと。そういう意味では「風花山本」は、定借によって私有が弱められ、空いている場所をみんなで使う形になっているように思いました。

藤原:庭園の中に住むような感覚がある住宅地ですが、ここを開発した工務店が樹木を管理しているところが良い場所になっている理由の1つですね。工務店がここに引越し、トライアンドエラーで庭の管理を行い、自分たちの技術として獲得しようとしている。庭木は一部を住人が、多くは工務店が植えて、みんなでつくった森のような存在になっています。

藤原:開発主体者自身が当事者としてそこにいるところもいいですね。日本ではあまり例がないのですが、マニラや台湾のコンドミニアムでは、デベロッパーが自ら何戸か持ち続けることが多いんです。デベロッパーもハウスオーナーズクラブの一員なので、「つくる人ー住む人」、「サービスを供給する人ー受ける人」という一方の関係性をゆるめる効果があるのかと思います。

藤原:場の運営に責任を持つ人がそこにいるというのは、時間が場所をデザインするという意味でも重要なポイントかもしれないですね。また「時間を内包する」という観点は、グッドデザイン賞における住まいの評価の意義としても大きいかもしれません。

藤原:自らが住む場を運営するという意味での「施主力」が上がっていることも感じますね。

藤原:たとえば「house S / shop B」はオーナーが建築家どころか構造家や施工者まで指名していますし、自分たちのまちに実存している存在としてお店が必要で、そういう場所が失われてしまうことへの危機感と責任感を持って場所をつくらうとしています。

藤原:小規模住宅を建築家が手がけるのは日本ならではの気がします。それはお金がすごくあるわけではなくても教養やセンスがある人が多いということなので、卑下したものではないですよ。

藤原:内田祥哉さんが、どの街にも建築の設計をしっかりとできる人とそれをつくれる職人がいるのは日本だけだとおっしゃっていました。生活文化のベースが高いことを自覚して、そこからつくれる社会、住まいのあり方を志高くつくっていきたいですね。

2022年6月2日 インターナショナル・デザイン・リエゾンセンターにて収録。

藤原 聡子(しのはら さとこ)

建築家。日本女子大学教授、同学長。

1958年生まれ。日本女子大学大学院修了後、香山アトリエを経て、空間研究所主宰。近作に「SHARE tenjincho」、近著に「アジアン・ commons」等。2012年度～2020年度グッドデザイン賞審査委員。

藤原 徹平(ふじわら てっぺい)

建築家。横浜国立大学 Y-GSA 准教授。

1975年生まれ。建築家としてだけでなく、アートやパフォーマンスなど領域を越境して地域デザインや産業再生のデザインに関わる。近作に「クルックフィールズ」「代々木テラス」など。2019～2023年度グッドデザイン賞審査委員。